

立憲民主党と国民民主党の合流がまとまらなかつた。それ自体は大きな問題ではない。二大政党制は世界的にも限界に達しており、ヨーロッパでは見る影もない。価値観が多様化した時代に、二大政党制は適合的ではない。多党の連立を模索するべきであり、野党側は「セーフティネット強化」と「リベラルな価値観」を共通テーマとして選挙協力をすればよい。

問題は、合流協議が支持者の思いをそつちのけにして、永田町の論理で進んでしまったことにある。これは、特に立憲民主党にとって深刻な事態である。

立憲民主党が立ち上がったのは2017年10月。民進党が小池百合子東京都知事と結びつき、希望の党に合流した時、野党支持者の多くが「選択肢がない」と感じた。さらに排除の論理が表面化すると、SNS上で「枝野立て」という声が噴出。これは「私たちに選択肢を作ってくれ」という悲痛な叫びだった。このうねりに枝野幸男氏が呼応。一人で記者会見に臨み、立憲民主党が立ち上がった。「立憲民主党はあなたです」と枝野氏が語ったとき、支持者と政治家がダイレクトに結びつき、大きな政治現象が生まれた。多くの支持者に「自分たちの声が届いている」「自分たちの思いが直接反映されている」という実感を与えることに成功したことが、党の躍進につながった。だが立憲民主党は約一年で失速し、支持率が低下し続けている。それは国民民主党

## 立憲民主党の危機

中島 岳志

## 風速計

ふう そく けい

との勢力争いが表面化し、さらに候補者選定などトップダウンの決定が続いたことで、支持者とのつながりが脆弱化したことに原因がある。「自分の声なんて届いていない」という思いが広がったとき、立憲民主党への期待はしぼんだ。問題は党執行部と支持者の間にできた距離感にある。これを埋める努力をし、両者が一丸となる「物語」を再生しない限り、党に未来はない。

2月2日の京都市長選でも、立憲民主党の支持者は党の決定にそっぽを向いた。KBS京都の出口調査では、立憲民主党の支持者の多くが、共産党・れいわ新選組推薦の福山和久氏に投票し、立憲民主党本部推薦の相乗り候補・門川大作氏への投票数を大きく上回った。門川氏は当選したが、党執行部と支持者の距離が表面化した形だ。

立憲民主党は大きな岐路に立たされている。党利党略よりも支持者の声を大切にしたい方がよい。